

たかともさんいしやくしじ
高富山石薬師寺



浮世絵にも描かれた山門



くうかい
空海

しよざい すずかしいしやくしまち | ばんち
所在 鈴鹿市石薬師町 | 番地

そうけん たいちよう しん きねんかん
創建 泰澄 神亀年間 [724~728年]

ほんぞん いしやくしによらい せきぶつ たかさ
本尊 石薬師如来 石仏の高さは7尺5寸(2.27m)

とうじしんごんしゅう しゅうそ くうかい こうぼうだいし
宗派 東寺真言宗 宗祖: 空海(弘法大師) [774~835年]

ふくだかんしょう
住職 福田寛紹 059-374-0394

この寺の名はその昔、高富山^{たかともざん}瑠璃光院^{るりこういん}石薬師堂^{いしやくしどう}といわれていた。国道1号線と立体交差する旧東海道の陸橋を「瑠璃光橋^{るりこうばし}」といい、その名を留めている。寺はその橋の南側、上野町と石薬師町の境界にあって、現在の住所は石薬師町 | 番地である。

本尊の石薬師如来は文字通り「石の仏像」で、由来は、まだこの辺りが奥深い森林におおわれた原始的な時代にさかのぼる。奈良時代の初期のころ、泰澄^{たいちよう}というお坊

さんがこの地を旅した時のこと、森の中から突然、紫色の雲(煙)が立ち、あたり一面に妙香みょうこうが漂い、大地が激しく揺れ動いたそうです。お坊さんが森へ立ち入ると、威容いよう厳然げんぜんとした巨岩が現れてくる光景が目にとまりました。これは「医王尊・薬師如来」

の出現であると確信し、そこに小さな堂を建て石の供養くようをしたと言われている。

平安時代に入り延暦十五年〔796年〕8月14日(注1)嵯峨天皇さ が てんのうの時代に、弘法大師こうぼうだいし(空海くうかい)がこの地を訪れ、自ら靈石に薬師如来の尊像を彫刻して開眼かいげん供養くようしたとの記録が残る。その後、信仰が広がってついに天皇の耳に入り、勅願所ちよくがんしょ(注2)となって「西福寺さいふくじ」として広大な寺領をいただき壮麗な堂坊どうぼうを建立したと伝わる。しかし、戦国時代に羽柴秀吉と織田信孝との争いに巻き込まれ、高富城を攻めた蒲生氏郷がもうじさと勢の兵火に遭い、堂坊は一朝にして悉ことごとく焼失した。この災難に時の住職であった円賢えんけん法印ほういんは、直ちに仮堂を建て香燭た こうしよくを供えて広く諸人の病苦を救ったと言われている。

江戸初期に伊勢の国神戸城主かんべじょうしゅ 一柳監物直盛ひとつやなぎけんもつなおもりが薬師堂を再建、寛永六年〔1629年〕に完成したことが棟札むなふだで確認されている。今のお寺はこの時のものである。その後、寛政六年〔1794年〕に厨子か ずしが新調され、扉には[菊の御紋]が彫り込まれている。石薬師如来の石は大地の底深く、金輪際こんりんざいにとどいているといわれ、本堂のほの暗い厨子の中に安置されている。

江戸時代、参勤交代さんきんこうたいの大名衆は源範頼みなものりよりの戦勝祈願の故事にならい、必ずこの寺に参拝したと言われている。当寺住職か ごとの駕籠には[菊の御紋]が付いていたので、大名行列も道みちを譲ったとの話も残っている。

寺の記録には、西行さいぎやう・一休いっきゅう・烏丸光広からすまるみつひろきやう 卿きやう・林羅山はやしらざん・沢庵たくわんぜんし 禅師などの和歌や漢詩が多く残されている。また、安藤あんどう 広重ひろしげの東海道五十三次「石薬師」を代表する風景として石薬師寺が描かれている。オランダの画家、フィンセント・ファン・

ゴッホが描いた『^{たんぎーじい}タンギー爺さん』の右上に『石薬師の蒲桜』が描かれていることには驚かされる。

(注1) 亀山市の^{なちざんしょうじゆいんせきじょうじ}那智山松寿院石上寺に残る「^{さんじゃき}三社記」に空海がこの地に来られたことが記録されており、この発見によって従来の年代が^{かいてい}改定される。

(注2) 天皇の^{きがん}祈願する寺